

## 8

## ジョージ・ワシントンと曲亭馬琴の義歯の比較

新藤 恵久

日本歯科医史学会

アメリカ初代大統領 George Washington (1732-1799) の顔は数点伝えられている。その一例は、フランスの彫刻家フードン作の53歳のワシントン像で、25セントコインや切手に使われており、他は、1796年に残存歯1本のみとなったワシントンを Gilbert Stuart が描いた肖像画である。前者は、祖国の父と呼ばれた闘士としての彼の風貌を良く伝えている。後者は、ニューヨークの歯科医 Issac greenwood の作った義歯を入れた肖像画で、1ドル札に見られる。この義歯は、上下の顎堤の間隔が少なく、そのために下唇が凹んでしまっていた。そこで口の自然観を回復させるため、脱脂綿を唇の内側に入れて膨らませたため、慈悲深いお婆さんのような顔になってしまったという。

ワシントンは若い頃から歯痛に悩まされており、彼の侍医 James Grake に痛む歯を抜いてもらうこともあった。そのため大統領に就任した1790年には、下顎左側小臼歯1本しか残っていなかった。義歯を作らせていたが、現存するのはグリーンウッドの作ったものである。

この義歯は、上顎の口蓋部は、金の板を鋳型で圧印したもので、この床に金を厚く軋着し、これに穴をあけて木のピンを立て、象牙製の歯形を取り付けたものである。下顎は一塊の象牙に歯形を彫っている。この上下顎床は、鋼鉄製のスプリングで維持されている。

この義歯を装着している間は、絶えず咬合圧で押さえていなければならないので、彼は人前では決してくしゃみをしなかったと伝えられている。くしゃみをすると義歯が飛び出してしまうからである。

19世紀まで、欧米では義歯は咀嚼の為の実用性は少なく、装飾のようなものであった。一例としてビクトリア王朝時代、歯を失った貴婦人は、パーティに出かける時、先ず寝室で歯無しで食事をとり、パーティ席上では決して食物に手を出さなかったという。

一方、日本の義歯は、材質こそ異なるが、審美的にも実用面からも今日の義歯と変わらぬ世界最古の義歯は、1538年に78歳で往生した和歌山の願成寺の創立者の上顎総義歯である。

この事より、わが国の義歯の創造は、すくなくとも16世紀には完成していたと考えられ、その背景には平安時代に完成された木彫の技術の継承によるものと考えられる。

床材は、本柘植が主流で、前歯部には象牙、軋石などが使われ、臼歯部には金属製の鋏が使われた。

滝沢馬琴(1767-1848)の義歯は現存していないが、61歳の馬琴が、文政10年6月より天保年間にわたる「馬琴日記」のなかでの義歯について詳細に記している。入歯師との交渉、義歯の構造、値段など知る事ができる。

「牛込神楽坂入歯師吉田源二郎へ罷超越、予、入歯上下共申付、形とらせ、金一両わたしおく、但、去ル申年五月中、上下共金壹両壹分ニ相定、内金壹分渡シ置候、古入歯片繫ぎニて間ニ合候間、延引。依之、先年下地拵置入歯、上の方不用ニ相成候付、金貳分ましく候儀申——後略」(文政10年6月)

「入歯師源八、下歯鋏打せ候事、十本ニてハ不足のよしにて十九本、打之。壹本貳分貳厘づつの処、金壹朱ニいたし候 後略」(天保5年10月18日)

発見された柳生飛騨守の上下総義歯は、江戸時代初期には、実用性、審美的ともに完成していた。